

## 1. はじめに

本発表では Malchukov et al. (2010)の提案する 2 種類の複他動詞に関する意味地図を提示する。まず 2 節では、R 項の意味地図を紹介し、本ワークショップで扱う 4 言語の複他動詞構文に現れる R 項が表しうる意味役割の範囲を意味地図に示す。この中でとくに他の 3 言語と比べると R 項が取りうる格の機能が比較的広いモンゴル語の事例を取り上げ、複他動詞構文の定義が難しいことを述べる。

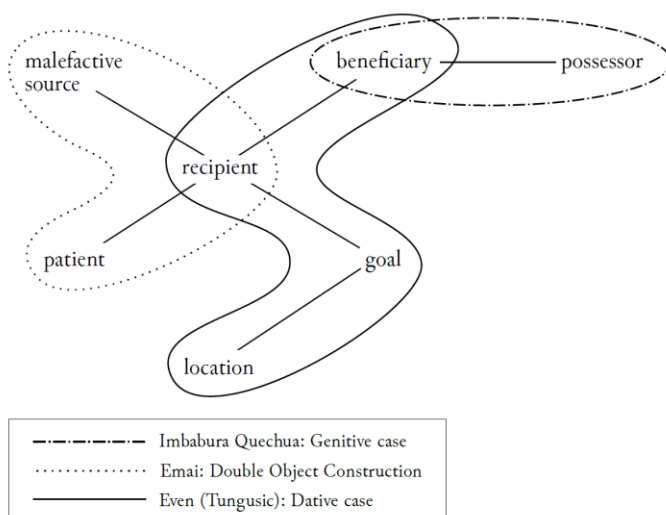
そして続く 3 節では、動詞意味タイプの意味地図を提示し、本ワークショップで扱う 4 言語のデータをそれに適用させて示す。その様相はやはり言語によってまちまちだが、それでも Malchukov et al. (2010)の提案する意味地図を逸脱するものではないということが分かる。

最後に 4 節で、Malchukov et al. (2010)の意味地図に含まれていないが、複他動詞と考えることができそうなさらなる可能性を提案し、議論を呼びたい。

## 2. R 項の意味地図

## 2.1. Malchukov et al. (2010)による R 項の意味地図

Malchukov et al. (2010)は R 項が取る形式がどのような意味範囲まで担いうるか、ケチュア語、エマイ語、エウエン語の事例を挙げて次の図 1 のような意味地図を示している。図は Haspelmath (2003)の与格意味地図に加え、三項動詞を取りうる malefactive source (被害の起点、「彼から金を盗った」と patient (被



動者、「彼を棒でぶった」) が右に枝を伸ばしている。ここでは R 項が担う典型的な意味役割 recipient を中心として、連続を成す意味役割を線で結ぶことで示されている。secundative タイプの分布を見せるエマイ語では recipient から左へ分布が伸びて patient 被動者に伸びている。左上の malefactive source はいわゆる二重目的語構文など典型的な複他動詞構文に現れやすいものであるという。エウエン語は recipient から右上は beneficiary、右下へは goal と location まで伸びる。ケチュア語では典型的な複他動詞構文は向格で成され、受益を表す属格形式が隣接する possessive も担うという。

図 1. Malchukov et al. (2010)による R 項の意味地図

## 2.2. 各言語での R 項の意味地図

## 2.2.1. モンゴル語

モンゴル語の複他動詞構文はいわゆる他動詞文に R 項が追加されたものであると考えられる。R 項は「与える」のような動詞の場合には与位格(dat: dative-locative)で標示される(例文(1))。「投げる」のような動詞の場合には方向格(dir: directive)で標示されるが、これは移動の着点も表す(例文(2)・(3))。

- 1) Би дүүд<sub>R</sub>                      Тэр номыг<sub>T</sub>                      өгсөн  
 bi   düü-d                      ter     nom-iig                      òg-sõn  
 1SG younger.brother-DAT    that    book-ACC                      to.give-PERF  
 「私は弟に本をあげた」 [recipient]

- 2) Би түүн рүү<sub>R</sub> чулуу<sub>T</sub> шидсэн.  
 bi tüün **riü** čuluu šid-sen  
 1SG 3SG DIR stone to.throw-PERF  
 「私は彼に石を投げた」 [goal]

- 3) Би сургууль руу явсан.  
 bi surguulj **ruu** jaw-san  
 1SG school DIR to.go-PERF  
 「私は学校に行った」

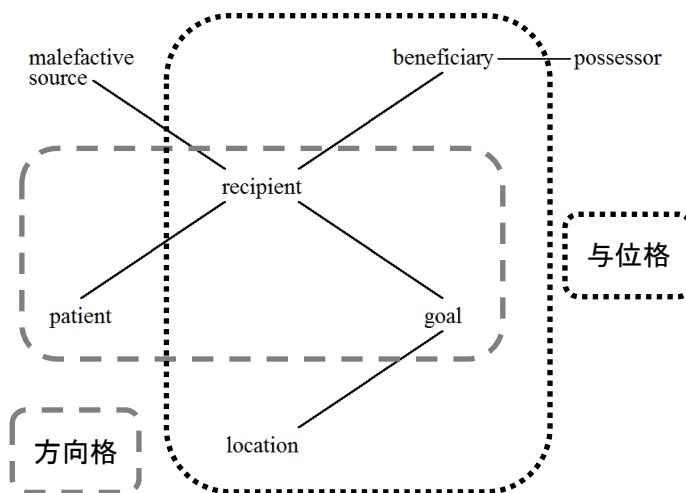


図 2. モンゴル語の与位格と方向格の意味地図

一部の移動動詞の項となる方向格は省略されることがあるが、複他動詞構文における受け手項がいずれの格も付されずに現れることは無い。方向格は接触動詞については被動者を表示することができる。与位格が表す **beneficiary** はモノの授受を含意する場合に限定されるらしい。

また与位格という名に表されているように、位格としての **location** の用法もある。goal を表す与位格と方向格の使い分けはどのように行われるのかよくわからない。

左がモンゴル語における意味地図である。

## 2.2.2. アイルランド語

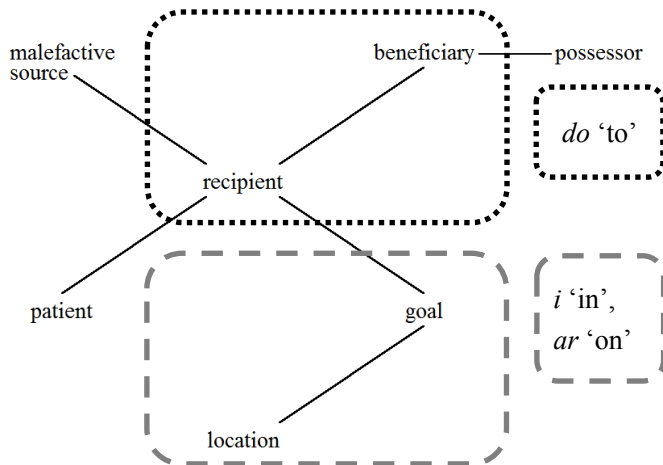


図 3. アイルランド語の前置詞 *do* 'to', *i* 'in' の意味地図

アイルランド語における複他動詞構文とは、VAP で示される他動詞文に R 項が追加されたものであると考えられる。

もっとも典型的な R 項である **recipient** は通常、前置詞 *do* 'to' によって標示される(例文(4))。

ただしこの前置詞は **recipient** に限らず、**beneficiary** も表しうる(例文(5))。

**goal** や **location** には、場所を表す前置詞 *i* 'in', *ar* 'on' などが用いられる(例文(6))。

左がアイルランド語における意味地図である。

なお、各例文はオンラインコーパス(参考文献を参照)から得たものである。

- 4) Thug Brian an t-airgead<sub>T</sub> do na daoine<sub>R</sub>.  
 give.PST PN DEF.SG money.SG to DEF.PL person.PL  
 「ブリーアンはその人たちにそのお金をあげた」 [recipient]

- 5) rinne mé bricfeasta<sub>T</sub> do C<sub>R</sub>.  
 make.PST I.SG breakfast.SG to PN  
 「私は C のために朝食を作った」 [beneficiary]

6) Chuir Róisín muga caifí<sub>T</sub> ar an mbord beag<sub>R</sub>  
 put.PST PN mug.SG coffee.PL on DEF table.SG small.SG

「ローシーンはコーヒーのマグをその小さな机の上に置いた」 [goal]

goal や location における前置詞の使い分けは、名詞の特性などによってなされる。それは、英語などの西欧語における前置詞の使い分けとある程度対応するものであろう。

### 2.2.3. ラワン語

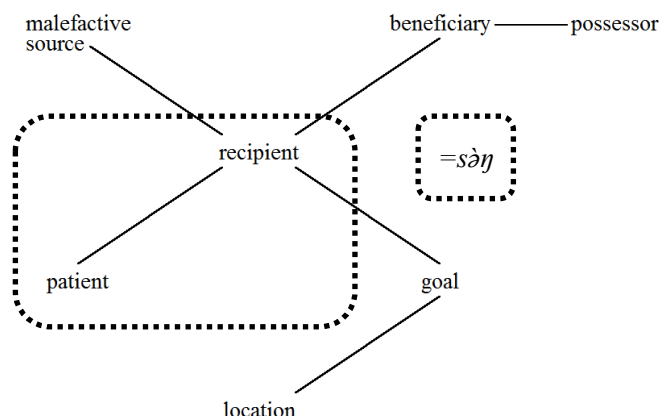


図 4. ラワン語の=sàŋ の意味地図

ラワン語では R 項を表す格の小辞=sàŋ が P 項を表す格小辞と同じ形式で表され、一見すると典型的な secundative タイプの分布を見せる。

ただし個別発表で検討するようにこれらの要素を単一のものとして見て良いかどうかについては問題がある。

具体的な例文を含め、詳細は個別発表にて紹介するので、ここでは意味地図を挙げるだけに留める。

### 2.2.4. フィジー語

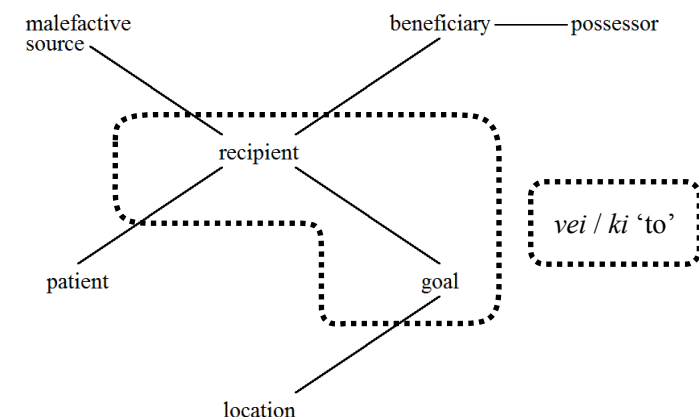


図 5. フィジー語の前置詞 vei / ki 'to' の意味地図

フィジー語では「与える」などの授受動詞では、前置詞 vei または ki を用いて R 項を示す。なお、どちらも英語の'to'に当たるような前置詞であるが、前者は人名及び代名詞に、後者は普通名詞に用いられる。

これに対し、「投げる」などの投擲動詞などでは secundative タイプのような分布も見られるという。

具体的な例文を含め、詳細は個別発表にて紹介するので、ここでは意味地図を挙げるだけに留める。

## 3. 動詞意味タイプの意味地図

### 3.1. Malchukov et al. (2010) の動詞意味タイプの意味地図

Malchukov et al. (2010)は次に、同じ格でも動詞の意味タイプによって意味役割が変わるという可能性について触れている。例えばロシア語の動詞 o-darit' 'give as a gift'は R 項に対格、T 項に具格を取るが、類義語である (po-)darit'は R 項に与格、T 項に対格を取る。

このように、動詞の意味タイプによって格配列に違いがあるということを、ジャミンジュン語(オーストラリア諸語、neutral タイプ)、フィンランド語(向格を用いた indirective タイプ)、西グリーンランド語(具格を用いた secundative タイプ)の事例を挙げて図 6 のような意味地図を示している。

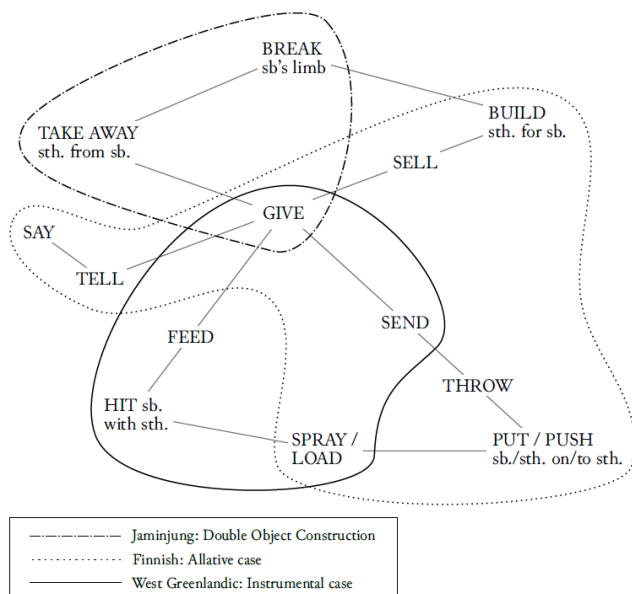


図 6. Malchukov et al. (2010)による動詞意味タイプの意味地図

### 3.2. 各言語の動詞意味タイプの意味地図

#### 3.2.1. モンゴル語

モンゴル語では R 項に与位格を取る動詞の範囲が広く、GIVE, SELL, SAY, TELL, FEED, SPRAY までをカバーする。右下に伸びる「向格経路」の SEND, THROW, PUT / PUSH については方向格が用いられ、SPRAY の位置で与位格とオーバーラップするという。また、PUT に関しては与位格との置き換えも可能であると思われる。

調査の意図を外れたデータであったため、下の表では与位格に含めていないが、TAKE AWAY についての調査では与位格を用いて「泥棒にお金を無くす」という表現が得られた。与位格が用いられたという点で複他動詞的であると言える。

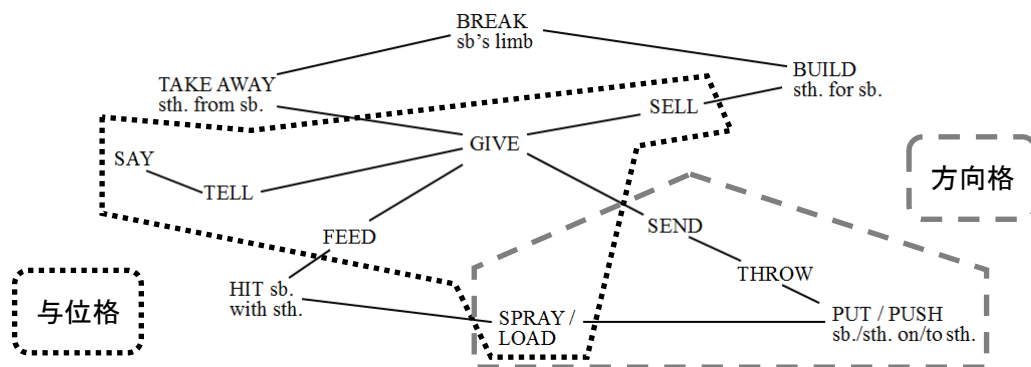


図 7. モンゴル語の動詞タイプの意味地図

#### 3.2.2. アイルランド語

アイルランド語は以下に示す通り、複雑な様相を呈している。R 項に前置詞 *do* ‘to’ を取るのは GIVE, TELL, BUILD のみで、右下の「向格経路」の SEND, PUT / PUSH および SPRAY / LOAD では、R 項に方向を表す何らかの手段を取る。

問題となるのは前置詞 *le* (第一義には‘with’)を用いたものだが、これには2種類が考えられる。この前置詞が表しているものは、FEED, HIT に関しては T 項寄りの具格的な用法だが、対して SAY, SELL, THROW に関しては R 項を表している。なぜこのような奇妙な体系になっているのだろう。

このことについて、Müller (2000: 198)によると「古アイルランド語の *fri* ‘towards’ と *la* ‘with’ は現代アイルランド語の *le* に合流し、*as-beir fri* ‘says to’ は現代語で *deir le* ‘say with’ となった」とのことである。つまり SAY, SELL, THROW の 3 つの動詞が取る *le* を *fri* ‘towards’ に由来するものと考えれば、さほど奇妙ではなくなるだろう。

前置詞 *do* ‘to’ の使用域は BUILD が取る benefactive 的な要素にまで伸びるが、反対側の TAKE AWAY では malefactive 的な要素に別の前置詞 *ó* ‘from’ が現れる。

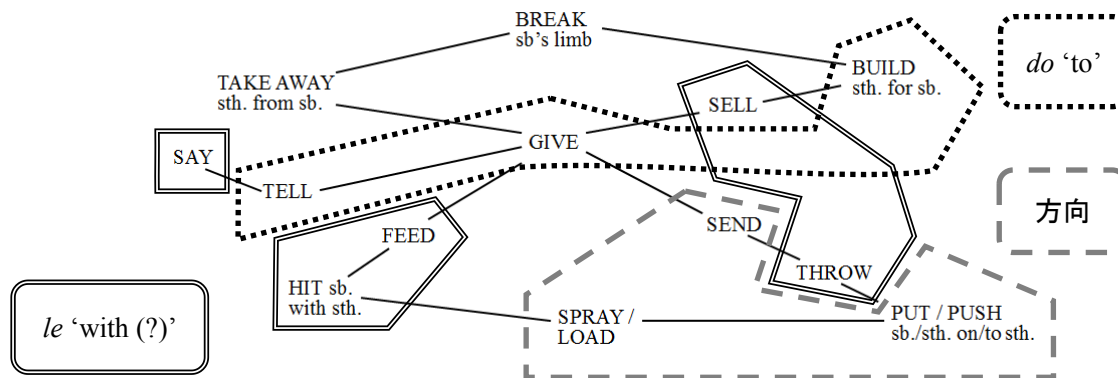


図 8. アイルランド語の動詞タイプの意味地図

### 3.2.3. ラワン語

ラワン語では、複他動詞的な振る舞いを見せるのは GIVE のみであり、2 節で述べた通り、R 項が対格小辞=*səŋ* を取り、さらに動詞は R 項に一致する。SAY, TELL についても R 項が対格小辞を取るが、動詞は R 項に一致しない。

FEED, SELL, BUILD は R 項を benefactive 的な *dəpat* 「～のために」 が示すが、反対に TAKE AWAY が取る malefactive 的な要素には奪格が用いられる。

SEND, THROW, PUT / PUSH, SPRAY / LOAD はそれぞれ向格や位格などが用いられる。

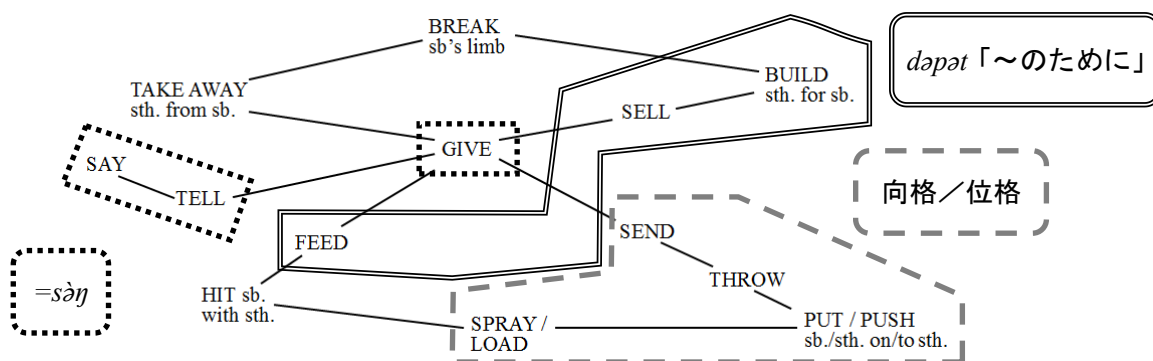


図 9. ラワン語の動詞タイプの意味地図

### 3.2.4. フィジー語

フィジー語では R 項に *vei / ki* ‘to’ を用いる動詞の範囲が非常に広く、GIVE を中心に左へ向かい TELL, SAY、右へ向かい SELL, BUILD, SEND, THROW, PUSH (ただし PUT では不可) までの形式でカバーされる。

FEED, HIT と SPRAY / LOAD に関しては *e* という前置詞が現れるが、前者は具格的な意味を持つのに対し、後者では位格的な意味を持つ。この 2 つを同じものとするべきか、という点には一考の余地があるかもしれない。

前置詞 *vei / ki* ‘to’ の使用域は BUILD が取る benefactive 的な要素にまで伸びるが、反対側の TAKE AWAY では malefactive 的な要素に別の前置詞 *mai* ‘from’ が現れる。

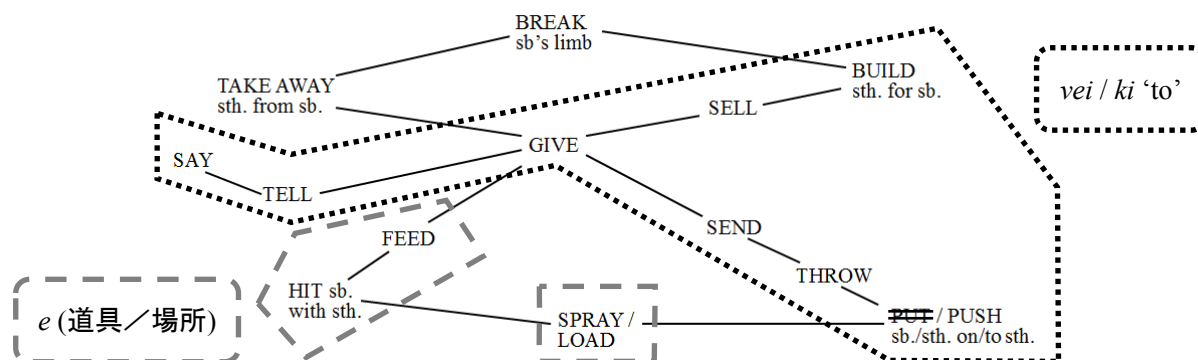


図 10. フィジー語の動詞タイプの意味地図

#### 4. さらなる可能性

ドイツ語は複他動詞に関して、Malchukov et al. (2010)が示すように与格・対格を持つ indirective タイプの言語であり、*geben* ‘give’などに関してはそのように振舞う。しかし *lehren* ‘teach’ という動詞は R 項・T 項ともに対格の二重対格(neutral タイプの配列)を用いる。ここでは Malchukov et al. (2010)が先行研究として挙げている Plank (1987)から例を引用する。

- 6) Frl. Schmidt lehrt die Mädchen das Stricken.  
 Miss PN teach.PRS.3SG DEF.PL.ACC girl.PL.ACC DEF.N.SG.ACC knitting.N.SG.ACC  
 「シュミット嬢はその少女たちに編み物を教えている」

[Plank (1987: 41)]

日本語で考えてみると、「彼は生徒に日本語を教える」では与格・対格という配列を用い、二重対格「\*彼は生徒を日本語を教える」は非文となる。だが、R 項・T 項の片方を落とした単他動詞構文ならば「彼は日本語を教える」「彼は生徒を／に教える」のように、複他動詞における R 項・T 項のどちらも対格で示すことが可能である。

英語に関しても状況は日本語とある程度対応していると考えられるが、このことから「教える」という動詞は、複他動詞としてまた違った特性を持っているはずである。このグループの動詞を仮に TEACH として、Malchukov et al. (2010)が提示する意味地図上のどこに配置されるだろうか。

#### 略号一覧

-: 接辞境界 / 1: first person 1 人称 / 3: third person 3 人称 / ACC: accusative 対格 / DAT: dative-locative 与位格 / DEF: definite 定 / DIR: directive 方向格 / N: neutral 中性 / PERF: perfect 完了 / PL: plural 複数 / PN: proper noun 固有名詞 / PRS: present 現在 / PST: past 過去 / SG: singular 単数

#### 参考文献

Haspelmath, Martin (2003) The geometry of grammatical meaning: Semantic maps and crosslinguistic comparison. In Tomasello, Michael (ed.), *The New Psychology of Language*, Vol. 2, 211-243. New York: Lawrence Erlbaum Associates Publishers. / Malchukov, Andrej. Martin Haspelmath and Bernard Comrie (2010) Ditransitive constructions: a typological overview. In Malchukov, Andrej. Martin Haspelmath and Bernard Comrie (eds.) *Studies in Ditransitive Constructions A Comparative Handbook*. Berlin/New York: Walter de Gruyter GmbH & Co. KG / Müller, Nicole (2000) *Agents in Early Welsh and Early Irish*. Oxford: Oxford University Press / Plank, Frans (1987) Direkte indirekte Objekte: Was uns lehren lehrt. In *Leuvense Bijdragen*, 76: 37-61

#### 参考資料

*Nua-Chorpas na hÉireann* (<https://focloir.sketchengine.co.uk/>), retrieved 17/05/2016.